ゆかなと手を取り合う登校

※ゲームクリア後にお読み下さい

著者：なかひろ

「お兄ちゃん、ちょっとっ」

登校の支度をしていた俺に、妹のゆかながずいっと迫ってくる。

「制服のネクタイ、曲がってる。襟もよれよれだし。今日から新学期が始まるのに、そんなだとクラスメイトに笑われちゃうよ？」

ゆかなは呆れながら、俺の身だしなみを整えてくれる。

こんなふうに、最近のゆかなはすっかり新妻化してしまった。まだまだ幼いところが残る妹なので、幼妻と呼んだほうがしっくりくるだろうか。

幼いと言っても、ゆかなの主婦力は群を抜いている。料理はさることながら、洗濯や掃除だってソツなくこなす。毎朝、俺を優しく起こしてくれるところもポイントが高い。

「うん、これでよしっと。お兄ちゃんはあたしがいないと、なんにもできないんだから」

「おまえが世話焼きなだけだと思うけどな。まあ、文句どころか感謝しかないけど」

「えへへ。だったらお兄ちゃんは、毎日あたしにお世話されてね。今はふたり暮らしだし、なんだってしてあげるから……。し、シモのお世話の話はしてないでしょっ、お兄ちゃんの妹童貞！」

……妹童貞だったら、もう卒業してるんだけどな。だからゆかなも、シモのお世話なんて言ってしまったわけで。

ふたり暮らしというのは、本当のことだ。この春から、姉のやえかが遠くの学校で教鞭を振るうことが決まったからだ。

この暮らしにはいろいろ不安も抱いてしまうが、生活力のあるゆかながそばにいてくれれば、俺もちゃんと生活できるだろう。

生活ならぬ性活にならないよう、気をつけるべきだけどな！

「晴れてお兄ちゃんの学校に入学できたし、これからは毎日一緒に登校できるねっ」

ゆかなはうれしそうに言う。ふたり暮らしが始まっただけではなく、俺たちは通う学校も同じになったのだ。

「楽しみだな～。登校だけじゃなくて、下校だってお兄ちゃんと一緒なんだもんねっ」

「え？　下校は別々でいいんじゃないか。むしろそうするべきだ」

「なんでそうなるのっ、お兄ちゃんの妹童貞！」

「童貞は卒業してるってのに、そんな暴言吐くのはこの胸か？　ああ？」

「お兄ちゃんがあたしの胸をたぷたぷしてる！　お兄ちゃんの妹セクハラ！」

「冗談だって」

「……お兄ちゃん以外の人がやったら、冗談じゃ済まされないけどね」

もちろんだ。そんな男が現れたら、兄の俺が抹殺してやる。

「お兄ちゃんがあたしと一緒に下校したくないなら、それでいいけど……。あたしも、お兄ちゃんを困らせたくないし……」

ゆかなが悲しそうにするもんで、俺は慌てて理由を説明する。

「そうじゃなくてさ、おまえはまだ入学したばかりだろ？　だったら、まずは新しいクラスで友だちを作ろう。早くクラスに馴染めるように、放課後は友だちと遊んだりしたほうがいいってことだ。俺はおまえを大切にしたいんだよ。友だちと一緒に笑ってるゆかなだって、俺は好きなんだからさ？」

引っ込み思案だった昔とは違って、今のゆかなは友だちの輪に入ることができる。それなのに、兄の俺にべったりでは、クラスで孤立してしまう恐れがある。

俺はなにより、ゆかなの幸せを大切にしたいのだから。

「ゆかな。ふたりで下校するのは、それからでも遅くないだろ？」

「……お兄ちゃん、優しいんだから。ありがとね」

ゆかなも理解したようで、俺に微笑みかけてくれる。

「こういうときのお兄ちゃん、すっごく頼りになるんだから……。だからあたしは、お兄ちゃんのことが好きになったんだよ」

そして俺たちは、どちらからともなくキスを交わした。

「これ……いってきますのキスだね」

唇を離してから、ゆかなが照れくさそうに言った。

「そうだな。ゆかながよければ、毎朝したいくらいだよ」

「あたしは朝だけじゃなくて、夜もお兄ちゃんといっぱいキスしたい……えへへ」

こんなふうに、今の俺たちは仲の良い兄妹を超え、まるで恋人のような関係になっている。だとしても、後ろめたいことなんてなにもない。

「いこうか、ゆかな」

「うん！」

俺たち兄妹は、しっかりと手をつなぎながら、学校までの道を歩き始めた。